

岐阜県立高等学校入学者選抜に関する諮問会（第4回）議事録

日 時：平成23年11月1日（火）

場 所：岐阜県庁・教育委員会室

- 1 開会
- 2 教育長挨拶
- 3 資料説明
- 4 審議

<各委員発言要旨> ※会長 ○委員

※ これまでの審議内容を踏まえ、諮問事項1「現行の入学者選抜制度の検証については、答申案として次のようにまとめたい

- 「多様な選抜方法による多面的評価」については、現行の入学者選抜制度の特長として評価することができると考えられる。一方で、評価する観点をより明確なものとする等、高等学校入学者選抜における明瞭性及び公平性の担保といった観点からの改善が必要であるとともに、高等学校入学者選抜の本来の機能を十分に踏まえたあり方の検討も必要であると考えられる。
- 「生徒の学校選択幅の拡大」については、現行の入学者選抜制度は、「行きたい学校」を最大2回まで受検できることを保障した制度として定着しているものの、入試期間の長期化による影響は予想以上に大きく、特に、15歳という精神的に成熟しているとは言いきれない時期の受検生にとって、過度の心理的負担を強いることによる弊害は深刻であるといわざるを得ない。また、不合格になることへの不安感から、第一志望ではない学校へ出願先を変更する状況がみられる等、2回の受検機会を確保するという導入時の理念が、十分に達成されていない場合もある。

- 限られた時間、多数の受検生といった状況で実施する集団面接は、選抜として有効に機能しない場合が多い
- 単位時間を長くして、個人面接やディベート等を実施すれば効果はある
- （集団面接は）必要とする高校が実施すればよいのではないか
- 面接の結果をどのように評価するのか、できるのかについても整理が必要
- 中学校としては、面接は是非必須にしてほしいと考えている
- 中学校における面接に向けた指導の中で、生徒一人一人の志望動機などが明確になる場合も多い
- 中学校としては、学力も含めて生徒一人一人を様々な面から評価してほしいと考えている

- 面接を必須にするかどうかは、調査書の比重の在り方とも関連している
 - 中学校長のほとんどが面接を必須にしてほしいと考えている
 - 学力検査だけではなく、面接を実施して、直接目で見て受検生を評価してほしい
 - コミュニケーション能力の育成・評価といった観点からも面接は重要
 - 県が実施する入試として、受検生をどのように評価というメッセージも重要
-
- 面接は、選抜資料としての機能が十分でない部分は確かにある
 - 中学校においても、長時間の面接指導が必要となり負担増になる
 - ただし、この面接指導の中で、個々の生徒の素の部分が見えてくることが多い
 - 将来、社会に出た場合の適応力とも関連する部分も多く、面接指導は、子どもにとって絶対に役に立つものである
-
- 選抜する側の視点で考えると、集団面接からは、選抜における有効な情報は多くは得られない場合が多い
 - 特に大規模校における集団面接は形骸化する可能性が高い
 - 個人面接等、集団面接とは異なる方法で、高校として必要と考える場合に実施すればよいのではないか
-
- ※ 中学・高校それぞれの立場の違いから、なかなか意見がまとまらない
 - ※ 他の立場からの意見はどうか
-
- 面接を必須とするのかどうかについては、入試日程とも関連がある
 - 全員に十分な時間を確保した面接を実施しようとするれば、1日の入試だけでは足りないのではないか
 - 共通の検査は1日の実施と考えているのか
-
- 高校にとって、学校ごとに検査日数に差があると、受検生の高校選択の際、検査日数の多い高校を敬遠するのではないかと意見もある
 - 全校が2日間の実施という考え方もある
-
- 共通検査において面接を学校選択とした場合に、どう説明するのか整理する必要がある
-
- 岐阜県としてのどのようなビジョンをもち、それを入試制度にどのように生かしていくのかといった理念が必要
 - 機能的な集団面接の実施は本当に不可能なのか

- 面接においては、第1印象で結果が左右される部分は否定できない
- 第1印象を重視すると、検査当日の制服等を新着する等、保護者の経済的負担を不安視する意見もある

- 入試においても多様性は重要
- 面接を一律に実施する必要はないのではないか
- 確かに、社会で必要なコミュニケーション能力の育成は重要であるが、必要な能力を面接指導を利用して伸長するのではなく、他の方法で伸ばせばよいのではないか

- 現在、実施している集団面接からは、あの短時間で受検生のどこを見てくれたのかといった疑問が生じることもある
- 面接を実施するなら個人面接が有効
- 面接の指導を通して子どもが変化するのも事実
- 面接の有無、内容の軽重も学校選択の目安となる

- 初対面で一体どこまでわかるのかといった疑問、短時間で本当に判断できるのか不安などはある
- 面接の実施は高校選択とすればよいのではないか

- 中学校としては、偏差値によらない指導、生き方について考えさせる機会がほしい
- 面接のみを利用して、生き方の指導をしようとは考えていない
- 県が実施する入試制度として、一つ理念を貫いてほしい

- 面接は実施するなら個人面接がよいのではないか
- 学校規模が大きい場合、たとえ入試日程を2日間にしたとしても、全員に個人面接を実施することは困難ではないか
- 面接で一律に評価することを考えるのではなく、調査書の評価で人物評価を担保することはできないか
- 面接の議論は、調査書の評価、比重とも関連する部分が多い

- 仮に、全校において2日間の検査日の設定が可能であれば、1日目に学力検査、2日目に集団面接する方法も可能でないか

- 面接など、選抜においては具体定にどのように評価しているのか

- 面接の結果は1点刻みに得点化し評価することは難しい

○ 客観的な情報を基としたうえで、面接の結果も含めて総合的に審査するとするのが無難な方法

○ 面接は評価者によっても尺度が違う場合もある

○ 面接の結果を厳密に点数化し選抜に取り入れることは困難ではないか

○ 検査日を全員2日間にすることは、地域によっては大きな課題となる

※ 面接を必須とするのかどうかについては、この場で一定の結論を見出すことは難しい

※ 本日の審議内容を踏まえ、今後、答申にどのように盛り込むのかについて、会長及び副会長で預かりとしたい

○ 中学校長の多くが調査書の比重を均等とすべきと考えている

○ たとえば、調査書の評定：学力検査の結果＝3：7となった場合、「当日の検査だけでければいいのではないか」との印象はどうしてもある

○ 比率はどうしても公表しなければならないのか

○ 選抜方法としては、すべての受検生を、調査書の記録（評定とその他の記録）と実施した検査で評価する中で、客観的な数値として、調査書の評定と学力検査の結果を表すといった順序が大切

○ 比率は出してもらったほうが分かりやすい

○ 選抜はすべての選抜資料のすべての情報をもとに総合的に審査するというのが大前提

○ そのうえで、出願先決定に資するため、数値化している部分（評定：学力検査の結果）を公表するという考え方でよいのではないか

○ 高等学校長の考え方を整理すると、一本化された入試において、調査書の比重について、あまり極端な傾向にならないのではないか

○ 調査書は9教科、学力検査は5教科であり、5教科以外に重きを置きたい場合は、必然的に調査書重視となるため、比重には幅を持たせるべきである

※ 共通の選抜における調査書の比重については、公表する部分として、調査書の評定：学力検査の結果を7：3～3：7の範囲で高校が決定する方向で検討してほしい

○ 共通の選抜と学校ごとの選抜のどちらで先に合格者を決定するのか

- 学校ごとの選抜で先に合格者を決定する場合に、多くの生徒は、2度の評価機会を確保しようと考え、本来、限定的であるべき学校ごと選抜に入学を希望する生徒の大部分が出願することにならないか
- 評価の観点を限定的にするということは、たとえば、○○高校は、□□部、△△部で募集といったことを公表することになるのか
- 学校ごとの選抜は、チャンスが増えるから誰でも出願するといった状況にならないことが望ましい
- そのためには、どこをどのように評価するのかを明確にしないといけない
- 学科における専門領域については、どこまでが限定的なのか難しい部分もある
- 特に専門学科では、部活動に加えて、学科の専門性の部分でも評価したいと考えている
- 部活動でも、一般的な成果は調査書でも評価できる
- 学校ごとの選抜では、部活動でも、特に顕著な実績を評価すればよい
- 制度が一本化されれば、出願倍率も安定し、結局は出願者のほとんどが合格する可能性が高い中、ほとんどの出願者を対象として、2種類の選抜を実施することは、高校にとって負担増となるだけではないか
- 30%程度を上限として、実施する学校が評価基準を明確にして、基準に達する受検生が上限に満たない場合は、合格者数が上限と等しくならなくてもよいのではないか
- 専門学科で必要な実技能力を評価する場合は、具体的な検査内容を事前に示すとよい
- 実績を評価するというのはどうか
- 出願前に、出願者自身が、学校ごとの選抜に出願する価値があるのかが判断できるように、具体的な評価基準が示されるとよい
- 音楽科・美術科は学校ごとの選抜で合格を決定できる範囲を入学定員とすることは理解できる。また、これは両科に限定するのではなく、今後、県としてより特色ある学科を設置した場合にもあてはめてはどうか
- ※ 学校ごとの選抜において決定できる合格者数については、入学定員の0%～30%で高等学校長が定める方向で検討してほしい
- ※ 学校ごとの選抜における評価基準を明確にし、限定的なものとしてはどうか

- 全日制と定時制を同一日程とするのはよい
- 定時制で学力検査の実施教科を選択可とする場合、どの教科でも選択可というよりは、国数英は必須等、ある程度選択できる教科を決めておいたほうがよいのではないか

- 学力検査について、全日制は5教科必須で、定時制は教科選択可とする理由が必要

- 定時制は全日制の受け皿ではなく、全日制と定時制は同一日程で実施してほしい

- 学力検査問題を全日制と同じものにするのではなく、定時制は各学校で学校の状況に応じて、独自に問題を作成すればよいのではないか

- 二次募集では、学区なしとしても良いのではないかい
- 学区の制約があると、出願できない学区に行きたい学校があっても出願できなくなる

- 二次募集で学区なしは、私学への影響が大きいのではないか

- 二次募集の実施校は、学区のある普通科だけではなく、学区のない専門学科等も含まれるため、普通科に学区があってもよいのではないか

- 普通科で隣接学区まで出願可となれば、現実的には、二次募集実施校が出願できる範囲に何校かはあるのではないか

- 二次募集であっても、意欲ある生徒、目的意識の高い生徒を入学させたい
- 具体的な方法はなかなか難しいが、少しでも意欲のある生徒を合格させることができるよう、事務局においては、制度の細部にわたる仕組みを詰めてほしい